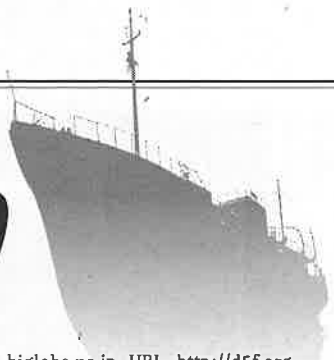


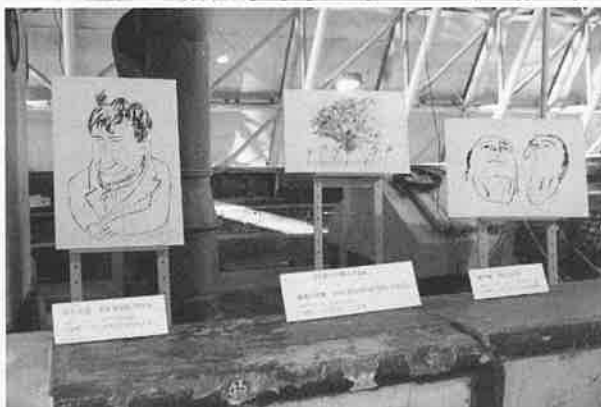
福竜丸だより

発行：財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島3-2 〒136-0081 第五福竜丸展示館内

Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail:fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org



写真上下、原爆症認定訴訟、広島で勝訴（八月四日）、東友会提供、2面も。写真左上、9月23日久保山忌の平和のつどいでボランティアの会の朗読、写真下・特別展より甲板上のベン・シャーン作品（複製）の展示。



日本被団協結成50周年によせて

被爆者は核兵器廃絶を求め

——原爆症認定の裁判をたたかい——

岩佐幹三

原爆症認定集団訴訟は、今全国二一の都道府県で一一八人の被爆者が、二高裁、一五地裁で裁判をたたかっています。

五月一二日には大阪地裁で、八月四日には広島地裁で、原告被爆者の全員勝訴（全面勝利）の判決を勝ち取りました。しかし国々厚生労働省はすぐさま各高裁に上告しました。

最高裁の判決さえ無視する国

原爆症認定訴訟の先駆としては、長崎の松谷英子さんと京都の小西健男さんが、二三年の歳月をかけて勝訴し、認定を勝ち取った歴史があります。

しかし国々厚労省は、これらの判決を活かして認定制度の改善をはかるどころか、逆に松谷さんや小西さんでも認

定されないような厳しい規程を設けて、被爆者の切実な願いを情け容赦なく切り捨てています。

松谷裁判や小西裁判は、個人訴訟ととられがちでした。それでは今もなお原爆症で苦しむ被爆者全体の問題になりません。あらためて多数の被爆者が集団で認定を申請することで、却下されたら訴訟での勝訴判決をもとに、国の不当な施策の抜本的な改善を求めていこうという運動に立ち上がったのです。

原爆被害を過少に評価する国

原爆症認定訴訟は、原爆被害のとらえ方をめぐる国と被爆者とのあらそいです。

国々厚労省は、原爆被害の実態を直視しようとはせず（2めんへつづく）

(いめんからつつく)

過少評価し、原爆症についても初期放射線の影響に限定して、遠距離被爆者や入市被爆者の疾病を認定しようとしているのです。そのため松谷最高裁判決で機械的運用が批判されたD.S.86という放射線量の測定基準に固執して、それをもとに被爆者の疾病等の有意さはどれだけかを測定する原因確率という新たな判定基準を設けたのです。

原爆の影響は、被爆者一人ひとりで異なり、数値だけでなく単純に判定できるものではありません。その上に原因確立の基礎となる対象者には、近距離被爆者と一部には遠距離



厚生省要請行動でダイ・インする被爆者

被爆者が比較されています。被爆者同士を比較の対象にして有意の差をいうのは、誰が見ても不自然なことです。

内部被爆の重要性も主張

原爆の影響を考えるととき大切なことは、原爆が放出した放射線によって放射能をおびた水滴やちり、ほこりなどが遠くまでまき散らされ、放射性降下物になって人びとの上に降り注いだことです。それを体に浴びたり、吸い込んだ人びと、また残留放射能で汚染された水や食物などを飲み食いした被爆者が、多く体内での内部被爆をしたと考えられます。

近距離被爆者だけでなく、被爆後に入市した人や無傷だった人が、急性症状にかかって沢山亡くなりましたが、内部被爆が原因だったとも推測されます。

遠距離被爆者や入市被爆者の中で急性症状を発病した人で、近年になってガンや甲状腺、肝臓などの内臓疾患で苦しんでいる人が少なくないこ

とが明らかになっていきます。

大阪地裁で最初に原告側の証人になった肥田舜太郎日本被団協中央相談所理事長は、広島被爆の医師として六〇年にわたり数千人の被爆者を診療した体験、ならびに内部被爆に造詣の深いアメリカの学者たちとの交流と現地調査をもとに、厚生省の基準では被爆者の被害の実態、中でも内部被爆は到底救えないことを丹念に証言しました。その証言は、裁判官の原爆に対する理解を深め、大きな影響を与えたと弁護士では評判です。

弁護士も毎月のように全国会議を、被爆者、医師団、学者、研究者などと開いて、国の基準D.S.86や原因確立などを徹底的に研究してきました。熊本では、被爆者と非被爆者を比較して有意の差を明らかにしてきました。

核兵器のない世界へむけて

こうした努力の積み重ねにより被告側の陳述や証人の証言の矛盾が白日の元にさらされ、国としては手の打ちよう

のないところまで追い込まれています。

裁判所としては、大阪地裁も広島地裁も、国側の基準は放射線量の測定には有効であるとしても、被爆者のかかえる被害の実態に対しては妥当性を欠くものとの判決を下したのです。原爆被害は、想像以上に変な被害であることを認めてくれたのです。

しかし国は、依然としてその判定基準は科学的な知見にもとづくという姿勢をくずしていません。

*

今年には日本被団協結成五〇周年です。さらにたたかいます。すべての裁判所での勝訴をめざして、法廷外でも大きな支援の輪を広げて、国会や地方自治体、マスコミなどを通じた多様な角度から、原爆被害の実態を認めようとはしない国に厚労省に施策の転換を迫っていかうと考えています。

こうしたとりくみをおして「ふたたび被爆者をつくらせない」「核兵器も戦争もない世界」をめざし、国民的に原爆の恐ろしさを知らせ広げ

て、核兵器そのものを許さない、核兵器なき世界の実現へつていきます。

(いわさみきそう) 日本原水爆被害者団体協議会事務局次長、第五福竜丸平和協会評議員)



この物語が忘れられるのを、待っている人たちがいる。

ここが家だ ベン・シャーンの
第五福竜丸

絵=ベン・シャーン 構成と文=アーサー・ピナード
装丁=和田誠 本日発売! ●1,680円(税込)

水爆実験に遭遇した第五福竜丸をテーマに、人類が生き残るための叙事詩を描いた絵本。

集英社

東京文化財研究所により エンジンの調査行われる



専門家による診断

展示館前のひろばに展示される第五福竜丸エンジンは、二〇〇〇年一月の公開以来、表面剥離やひび割れなどが進行してきました。とりわけ気筒部分の亀裂が大きく激しくなってきたため、協会は東京文化財研究所（東文研）に状

態を報告しました。

東文研は都がエンジンを展示するに当たって、その保存修復について諮問を受けて助言をしています。

気筒内部の錆太り

九月一日、急きよ同研究所の川野邊渉修復材料研究室長と中山俊介近代文化遺産研究所室長が来館し、都東部公園緑地事務所監督員の野上主事の立会いのもとエンジンの調査が行われました。

エンジンは川野邊さんの助言により二〇〇一年からボラントエアによる錆止めの薬品塗布が年二回おこなわれ、その効果で落ち着いた箇所もあります。

しかし、一方で機関内部の錆により鉄が膨張する「錆太り」によりシリンドラー六気筒のうち半数以上にひび割れが生じていることが確認されました。

定点観察で状態記録

川野邊さんの話では、エンジン引き上げ後搬送時に塩ビ塗装をしたことと、展示に際して脱塩処理が十分に行われなかったため、錆が内部に進行していることがあらため

て指摘されました。劣化の激しい箇所についてはレプリカ（複製）の製作も可能ではあるが、単なるオブジェではなく歴史の「生き証人」であることが重要なので、どの時点を「原型」として考えるが良いかということも含めた検討が必要とのことでした。

【書評】川口重雄

別府三奈子著「アジアでどんな戦争があったか——戦跡をたどる」

この夏、十年來の念願だった巻岐・対馬行に出かけた。平坦な地形で驚くほど水田の多い巻岐。長崎県で二番目に平野がそこにあるという。一方対馬は急峻な山々と入り組んだ海岸線、海の恵に比して

陸の实りの少ないことが素人目にもわかる。上対馬の韓国展望所から釜山まで四九・五キロ、観光客の八割が韓国人だといふこの島が、日韓両国の微妙なバランスの上に浮かぶ島だといふことが実感された。と同時に、そのどちらにも対馬海峡と朝鮮海峡をにらんでいた口径四〇センチ超・射程距離三五キロの砲台跡が今も遺る国境の島であることも。

爆音に接した実感との落差、わが子の一言で十年の間に日米間で積み上げられてきた戦争協力体制現実を確認した時の恐怖感。「日本が戦後六〇年の間に積み上げてきた常識など、ひとたび戦争になれば、今は非常時なのだという理由で、一瞬に消し飛んでしまふ」といふあやうい未来への予感が、二百カ所をこえる戦跡へと筆者をおもむかせた。

現地へ行ってみなければわからない——国内の史跡や韓国・中国・台湾の戦争遺跡を少しずつ訪ねるうちに募ってきた思いを改めて確認した旅から戻って、この本を読んだ。本書は二〇〇三年一二月から〇五年九月まで、筆者が中国・韓国・台湾・フィリピン・シンガポール・タイ・北マリアナ諸島・ベトナム・カンボジア・そして日本の戦争遺跡を訪ねた旅の記録である。筆者の執筆の意図は明確である。一九九一年湾岸戦争開始の第一報を米国リッチモンドで聞いた時の記憶と二〇〇一年「同時多発テロ」の翌日に横田基地を発進する米国機の

記録と記憶の交差する場所で、二〇世紀の百年間のアジアと日本の戦争を通しての関わりを自分の肌で体感しようとした筆者の試みは、歴史を遡る旅であると同時にアジアと日本の共有できる未来を見つける旅でもある。私たち読者も本書を持って、筆者の旅に参加しよう（かわぐちしげお／田園調布学園教諭、丸山真男手帖の会代表平和協会評議員）。

*

著者の別府三奈子さんは日本大学法学部新聞学科助教、写真は杜田洋一さん（日本広告写真家協会）。本書は（株）めこん刊 2500円＋税。

久保山さんの命日に さまざまな催し

秋のお彼岸の中日にあたる9月23日、久保山愛吉さんの命日にはさまざまな催しがおこなわれました。この日は心配した台風もそれ、爽やかな秋晴れの中1200人を越える来館者があり終日にぎわいました。

市民有志による第14回「平和を語る第五福竜丸の集い」では紙芝居や子どもたちの合唱、戦争や平和にまつわる歌なども披露され、80名余の参加者が一緒に歌うなど楽しみました。大石又七さんのお話のコーナーでは「原爆許すまじ」などのフルート演奏もあり、第五福竜丸ボランティアの会は4月に行われた「ラッキー・ドラゴン・クインテット」をBGMに「船をみつめた瞳」と題して来館者の感想文の朗読をおこないました。

会を準備された方々から昨年来1年をかけてこつこつ集めてくださった「小銭募金」や参加者からその場で寄せられた10万円をこえるご寄付をいただきました。ありがとうございます。

第26回久保山忌句会は40名が参加し、午前中の吟行と久保山碑への献花では、協会の川崎昭一郎会長が挨拶、午後は東陽町に会場を移して句会が行われました。高点句2名には、協会の山村茂雄理事より特別船員賞と記念品が手渡されました。

【特別船員証作品】

野分雲ビキノの重き風を持ち

荒井 孚

漁労日記「風良シ投縄」被爆の日

宇治橋 健

20回目を迎える「第五福竜丸のつどい」（東京原水協など主催）には50名が参加、青木佳子さんの案内で展示館を見学後、久保山碑に献花、協会よ

り川崎会長が挨拶しました。午後からは「BumB」で学習会が催され、アメリカの核戦略と第五福竜丸事件についての講演と、原爆症集団訴訟についての報告がありました。

マグロ塚を作る会は、“マグロ塚の前で語らいながら美味しいマグロを味わいましょう”と呼びかけ、協会の藤田秀雄副会長、川口重雄評議員をはじめ40名を超える参加者が近況報告や平和への思いを語り合いました。

20日より始まった「ベン・シャーンの第五福竜丸展」にあわせるかのように咲き出した彼岸花が、久保山碑やマグロ塚を彩り訪れる人の目を楽しませています。

メッセージボードを 始めました

来館された方の思いや願いを描いて貼り出すコーナーを作りました。日常では来館者ノートやアンケートに見学の感想などを書いていただいておりますが、他の来館者の目に触れることはあまりありません。そこで積極的に自分の言葉を遺してもらおうと、PIKADON プロジェクトで制作したカード（3枚セット100円）を購入してもらい自由にメッセージを描く・書くことができるようにしました。「みんなで作る展示」です。ぜひご来館のりにはご参加ください。



第五福竜丸の海図 俊鶴丸関係資料など 資料の寄贈を受けました

三重県伊勢市に住む奥村一郎さんは、1997年に第五福竜丸が使用していた海図3点を寄贈くださいました。その後2002年5月には、伊勢市大湊の強力造船所で改修中の第五福竜丸の写真を寄贈され、さらに今回、その写真のネガと海図2点を寄贈くださいました。

海図は、強力造船所で改修中に焼却処分になる寸前に奥村さんが入手したもので、ビキニ環礁周辺の地図には裏面に「第七事代丸」と墨で書かれています。

*

また、第五福竜丸の被爆後、ビキニ海域に放射能汚染調査に派遣された俊鶴丸丸に研究員として乗船した亀田和久さんから調査報告や関連資料、航海中の写真などの資料を寄贈いただきました。



ボランティアメール

夏の間、体調を崩して入院するメンバーもいて心配でしたが、9月23日には顔がそろい、下半期の研修などの企画を相談しました。10月は修学旅行、社会科見学の来館者のガイドをし秋のピークです。健康に留意していきましょう。